

編集後記

何となく世の中が涼しくなってきたので、冬服を着て河上徹太郎の「有愁日記」と東独の何とかいう男の「マルクス人間疎外論」を読んだ。‘何となく’と書いたが、私には此頃時間の観念が甚々希薄である。だから週刊雑誌や月刊雑誌というものは、全く読む気がしない。天文月報も読まないのだが、これは編集している間に内容が判ってしまうので、誤字を探す程度に終る。しかしながら、月報を一旦通読するならば、野尻抱影氏の名筆が時の移り行く勢いを強く印象づけるであろう。90才のご高齢をおして1年間ご執筆下さった氏には、感謝のしようもない。12号をもって氏の星座巡りが終わった後には、比較の対象とされないような、泥臭い写真のシリーズをやることになった。テスト写真やモニター写真を12枚集める予定である。シリーズ記事で以前好評だった「星座星表めぐり」は前編集部の努力で一冊にまとめられる。「理科年表による天文数値シリーズ」は、数表を作製する人々の立場から利用する方々への注解であるが、天文の部が完結するまでには、まだ多少の日月を要する。×月○日、編集部で書評が書評になっていないという議論があった。天文月報にふさわしい書評とは何か。どんな書物を取り上げればよいのか。大変に難しい。解説記事が難かし過ぎるという意見もある。しかしこれも、書いて下さる方々のご苦勞を察すると、注文がましいことを言う気になれない。宮本正太郎氏の火星の話は、ご多忙のところを心よくお引き受け下さった。また散々無理を申し上げた林忠四郎氏の太陽系の起源の話は、来年の1月号に予定している。解説記事を依頼しても、研究に手をとられていて、引き受けられないと返事する人もいる。是非その研究成果を読者に紹介してほしいと思うような人々の中にかぎって、そういう人がいる。編集係になると、やはり毎号を良いものにしたいと願うが、それだけを押し通すのもどうかと思う。組織の中の歯車となって機能を課せられると、その機能を益々重要化し発達させようとするのは、近代人の盲目的悪癖の一つである。これは自戒であって、校正がルーズなことの言い訳には

ならない。原稿の依頼だの広告取りだの、割付だの校正だのと苦勞してみると、何期も続けた編集部があったことは、私には奇蹟のように思えてくる。幸いにも Ks 氏、Nr 氏、Nk 氏のようなベテラン経験者に正論を吐く Si 氏が加わって、面白い編集部となっている。それでもパートタイマーの It 氏がいなかったならば、エンジンのない船の如き醜態を呈しかねない。読者諸賢のご明察を乞う次第である。
(編集部, Kd 生)

雑 報

- 新星二題**
Nova Oph. 1976 : 大分県日田市の桑野善之氏は、4 箇目の新星を写真原板上より次の位置に発見した。
 1976 年 U.T. α (1950.0) δ m_{pv}
 9 月 23.55347 日 $18^{\text{h}}00^{\text{m}}9^{\text{s}}$ $+11^{\circ}48'$ 8.8
Nova Vul. 1976 : 英国の G.E.D. Alcock は、次の位置に新星を発見した。
 1976 年 U.T. α (1950.0) δ m_v
 10 月 21.764 日 $19^{\text{h}}27^{\text{m}}1^{\text{s}}$ $+20^{\circ}21'$ 6.5
 (香西洋樹)

◇ 12 月の天文暦 ◇

日	時	記	事
4	3	月	最遠
6	2	海王星	合
7	3	望	
9		大雪	(太陽黄経 255°)
14	19	下弦	
19	21	月	最近
20	19	水星	東方最大離角
21	11	朔	
22	3	冬至	(太陽黄経 270°)
28	7	水星	留
	16	上弦	
31	18	月	最遠

1976 年 9 月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	2,	8	6	2,	3	11	1,	28	16	1,	1	21	0,	0	26	2,	4
2	2,	11	7	2,	3	12	—,	—	17	1,	6	22	—,	—	27	—,	—
3	1,	3	8	1,	2	13	—,	—	18	1,	6	23	0,	0	28	—,	—
4	—,	—	9	—,	—	14	1,	7	19	2,	3	24	1,	2	29	2,	4
5	2,	8	10	2,	15	15	1,	4	20	—,	—	25	1,	4	30	2,	6

(相対数月平均値: 14.0)

昭和 51 年 11 月 20 日	発行 人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷 発行	印刷 所	〒112 東京都文京区水道 2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 300 円	発行 所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13595

12月の星座

野尻抱影

1. カシオペア (CASSIOPEIA)

極月のせわしい町騒い、塙にいそぐ寒鴉とつぶり暮れた中空にスバルがほのめき、アルデバラーンが寒ばらの紅にきらめく。早稲田のマーク、カシオペアのWが転倒すればM, “おお明治!”

子午線経過12月2日, 単純なジクザグだが冬の北天にこれを欠いたらどんなに寥闊たるものだろうか。今沈んでいる北斗七星と対立して極をめぐり, かつ和名ヤマガタボシの角の2等分線で北極星を見出させる。

私は10年もこの和名を探した果てに, 四国観音寺町からイカリボシを報ぜられ, ヤマガタボシがこれに次いだ。北斗のカジボシに対するイカリボシは無二の好称である。

西名カシオペアはエチオピアの女王で, アンドロメダの母。虚栄の報いでこの椅子にかけたまま日に1回倒懸し転回する。

5星 β γ の西端 β (2等) は幻の本初子午線を区切り, 5星を5本指と見るところからカーフ(手)の名がある。南中の高さ 66° , 常用恒星の一つである。

2. くじら (CETUS)

子午線経過12月13日, うお座とおひつじ座との南にもうろうと見える大星座, 長方形の頭が大きなスーツケースに似ている。胸に有名な長周期変光星ミラが明滅している。

神話ではアンドロメダ王女が人身御供にされた化け鯨, あわやの瞬間にペルセウスがつけつけたメドゥーサの生首で石と化した。その化石が残っていると読んで, ギリシアのジョッパという土地を地図で探したこともある。

3. さんかく (TRIANGULUM)

子午線経過12月17日, アンドロメダの γ (アルマック, かかと) の南にある3-4等の鮮かな二等辺三角形。和名もサンカクボシで農耕の目標。

4. おひつじ (ARIES)

子午線経過12月24日。さんかく座のすぐ南で, α (2等ハマルノ羊の頭) と β (3等), γ (4等) の鈍角三角形。約2000年以前の春分点, “白羊宮の原点”の遺蹟は幻もない。

〔補遺〕 1月 おうし (TAURUS)

スバル (the Pleiades)

ギリシア時代にはおうしとは関係なく星座として独立し, 中国でも廿八宿の昴である。この方が自然と思われる。

スマル, ないしスバルは上代人の装身具の玉飾りで, 星名としては平安時代の和名抄に歌人源順が初めて記し, 清少納言がこれに倣ったが, 語意不明のためいろいろに転訛した。農耕漁撈の重要な目標として他にも方言が多い。関東地方では専らムツラボシといわれた。私はブラネタリウムでスバルよりこの解り易い地元の名を宣伝すべきだったと後悔している。

神話のプレイヤーズは月の女神の7人の侍で, 中のエレクトラが彗星となって消えた。台湾でも七姑娘で, たぶん何かの伝説を伴っていると思う。

話は変わるが, 古事記の序文を読むと, 大安万侶が壮重な漢文で, 天武の即位を「歳太梁に次し, 月夾鐘に踵り, 清原の, 大宮にして登りて天位に即き給う」云々と記している。

この“太梁”はスバル(昴宿)の別名で, 歳(木星)が次の十二宮の一つである。中国最古の字典・爾雅に「大梁昴也, 西陸昴也」とある。天武は壬申(672)二月だが, 「歳次大梁」は癸酉(673)で, 夾鐘は二月に当る。この種の漢名の語義は大崎正次君の考証を待つ他はないが, 天武側近のインテリたちが易々と駆使していたることに驚嘆を禁じ得ない。ついでだが, 神田さんが法隆寺の落書「六月肺出」を宇(彗星)と解する説を認めておられたらしいハガキが最近でできた。

さて1年にわたり放漫蕪雑な随筆で貴重な誌面をふさぎ, 諸賢の目を蔽わせたのも漸くここに終わる。オリオンすでに舞い立ち, スバルさざめく。さらばよ1976年!

黒谷が撞きおり除夜の星凍る 抱影

◇ 12月の日月惑星運行図 ◇

